

2022/1/24

(オマケの英語教室 Okkana bikkuri and hanshin-hangi) 書庫版



これは自分の感覚ですが

「これは上手く書けた。してやったり!!」

という自信満々、自分の中での「鳴り物入り」の方が後で読み返すと陳腐なものが多く。

どちらかというひょんなことから「ぼろり」と出たものや

「こんなんで大丈夫かいな？」

という半信半疑でおっかなびっくりで書いたようなものの方がそれよりは少しまともに思えたりすることが多いです。

他の物書きの方はどうなのかは知りませんし、何故半信半疑ものの方がまだましなのか理由もわかりません。

高校生時代に耳が不自由になったのに偉大な交響曲を書いたベートーベンの第九の主題

「苦悩を通して歓喜に至れ」に痛く感銘し、

「作品というものは悪戦苦闘の末に満を持して出すものだ」

と思い込み、大学のロシア文学科に進んでからは大作、力作揃いのドストエフスキーやらトルストイなどを読み漁ったのですが、どうもイマイチ、ピンとこず、結局卒論はロシア本国や我が国の学生さんの間では「思想性に乏しい」だの「主題やメッセージが不明確」だのと散々たたかれましたが、深刻ぶって「悩んでますポーズ」をしていず作品にユーモアが感じられて重たくない短編の名手と言われたチェーホフにしました。

今思うと彼を卒論に選んだ理由はたぶん控えめで「作り物が少なく」「嘘がない」からだったような気がします。

後は

「今の時流には合わないかもしれませんが、自分はこの書き方で書きます。評価は後代にお任せします」

といったような、覚悟を決めた「潔さ」のよおなもの自分には感じられたからかもしれません。あくまで自分の感想ですが。

どうも自分は力作、大作、鳴り物入りが苦手なようで「半信半疑のおっかなびっくり」や「ほんまかいな」の方が性に合っているような気がしております。

処で、上述の「半信半疑」や「おっかなびっくり」を英語では何というのか？

是又我流英語訳では

半信半疑が読んで字のごとく

Half believing, half doubting

ならば、おっかなびっくりはというと、その様態（反応の様子）からひっばってきて

In front of unknown world mode

とか

Unknown objects blind touching mode

とか。

それこそ是又

「ほんまかいな？」

そのものですが。

余談)

自分のこの「一般的な英和や和英辞書には載っていない」日本の四文字熟語や成句を使って敢えてそのまま直訳したり、その熟語や成句を絵画的に意識したりした英語をほんの時たまですが、外国人さんの中には

Funny but understandable, can image easily

(おっかしい。でも分かるわ。イメージしやすい)

といてくれたりする人もおります。

日本の四文字熟語や成句というのは、意味を理解すると外国人には非常に面白く興味深い表現 (not funny but interesting expression) に映る場合があるようです。